

『播州名所巡覧図絵』長田条訳注

中村 健史

本稿は『神戸学院大学明石ハウス「くずし字解説講座」活動成果報告書『播州名所巡覧図絵』『明石郡』訳注』（神戸学院大学地域研究センター、二〇二一年）にならって、『播州名所巡覧図絵』のうち、地域研究長田センターの所在する長田周辺の記事に訳注を施したものである。

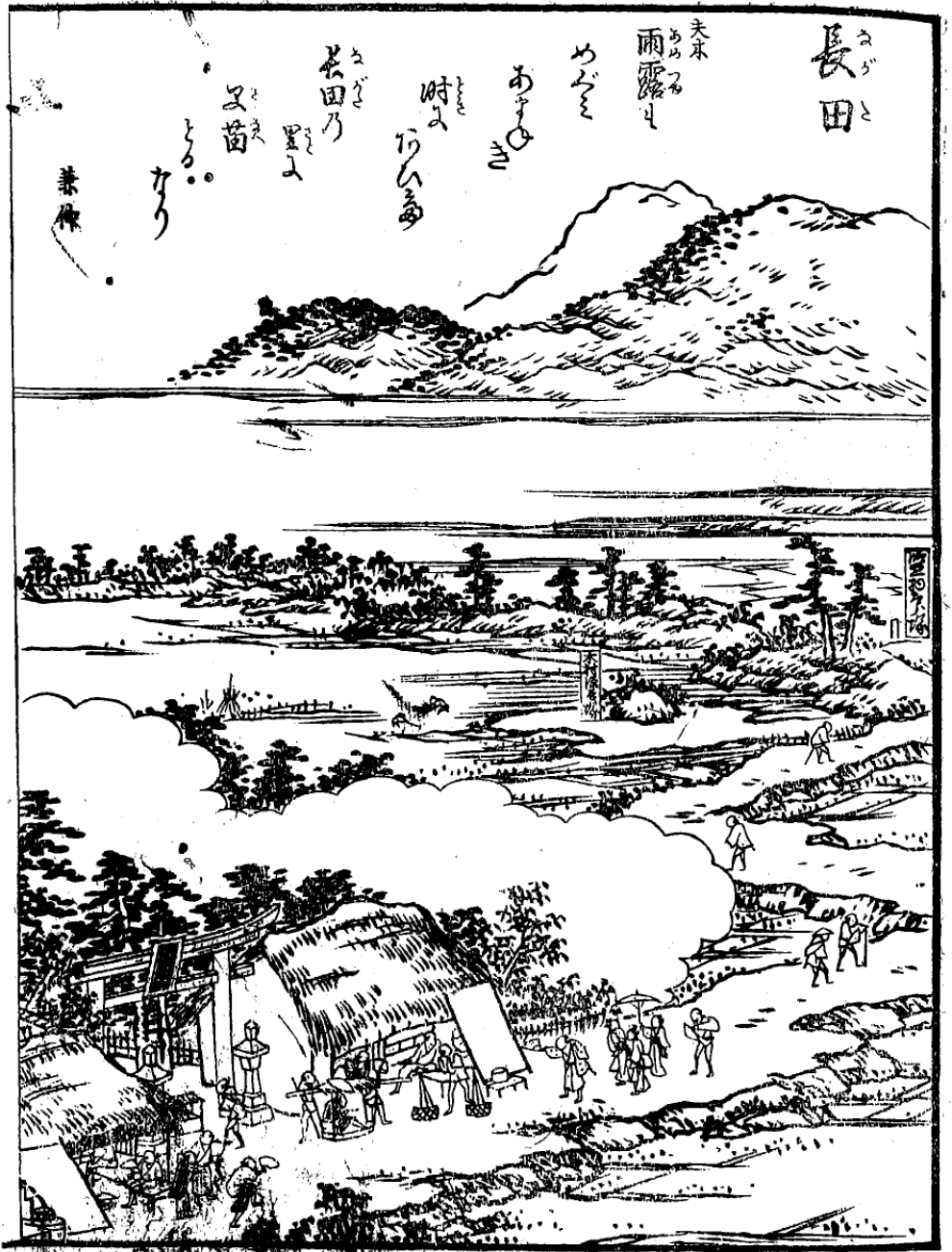
『播州名所巡覧図絵』五巻五冊。文化元年（一八〇四年）刊。秦石田著、中井藍江画。長田に関する記述は巻二の巻頭部分にある。参考までに巻二の目録より関係箇所を翻刻すれば以下の通り。

播磨名所巡覧図絵巻之二目録

長田神社	本社	八幡	観音	御供所
長田の里	末社	村上灯籠		
盛俊の墓	明泉寺			
駒林 同松	尻池			
忠度塚	淀の継橋			
まのゝ橋	匂ひの梅			
知章孝死図	頼賢忠死図			
真野の池	盗人松			

【凡例】

- ・翻刻の底本は神戸学院大学蔵本である。影印も同本による。
- ・漢字は原則として現在通行の字体を用い、常用漢字に新字体がある漢字は、その漢字を用いた。
- ・清濁は原本に従った。句読点・記号等は私に付した。また、仮名遣いの誤り等は訂正せず、そのまま翻刻した。誤字と思われる箇所も可能な限り原本のまま翻刻した。
- ・近世通行の合字（「こと」「より」等）は平仮名に改めた。また、小文字片仮名の送り仮名「ニ」「ノ」は平仮名に改めた。
- ・挿絵余白の書き込みは下段に翻刻した。書き込みの現代語訳は必要に応じて語注のなかに繰り込んだ。
- ・挿絵中の囲い文字 は影印画像の上に、おおむね右から順に示した。
- ・語注が該当ページに収まらない場合は、次ページに掲載した。
- ・その場合、丁移りに当たる箇所を点線……で示した。
- ・語注作成にあたり、『播州名所巡覧図絵』に先行する近世期の主要地誌として、『摂津名所図会』の記述との対照を行った。
- ・翻刻にあたって井口洋氏校訂『播州名所巡覧図絵』（柳原書店、一九七四年）を参照した。



ながた

夫木

雨露も

めぐみ

あまね

き

時に

あひて

長田の

里に

早苗

とる

なり

兼仲

雨露も：「雨露もひろく恵みが行きわたる太平の世にめぐりあつて、長田の里で早苗を手に取り植えていることだよ」の意。
『夫木和歌抄』一四六五八番歌。作者は広橋兼仲（一二四四〜一三〇八年）。ただし『夫木抄』によればこの「長田の里」は「近

江又出雲」の地名らしい。

監物太郎塚 監物太郎頼方（頼賢）の墓。

くわしくは後述。墓は『撰津志』の編者並河誠所が建立したもの（『撰津名所図会』）。

木村源吾塚 木村源吾（五）重章（源三成

綱）の墓。一ノ谷合戦で平通盛と戦って討

ち死にした。『源平盛衰記』第三十七・忠

度通盛等最後事に「近江国佐々木庄の住人

木村源三成綱といふ者、落ち合ひて組んで

けり。（中略）三位上になり給ふ。源三は

ね返さんはね返さんとしけれど、三位力

増なりければ、抑へてさらに働かさず。刀

を抜き、源三が首を掻けども掻けども落ち

ず」云々とある。なおこの人の名を源五重

章とするのは謡曲『通盛』に拠る。「近江

の国の住人に木村の源五重章が、鞭を上げ

て駆ける」。墓は通盛墓のそばの池のな

かにある（『撰津名所図会』）。



ながたのやしろ
長田社

さいしんごころぬしのみこと
祭神事代主命

せつしや
撰社 二祠

まつしや
末社 四社

とりい
鳥居の額は小野の
道風の筆
いしとうろ
石灯籠は村上天皇
の御寄附なり

ながたのやしろ
長田社 祭神事代主命

せつしや
撰社 二祠

まつしや
末社 四社

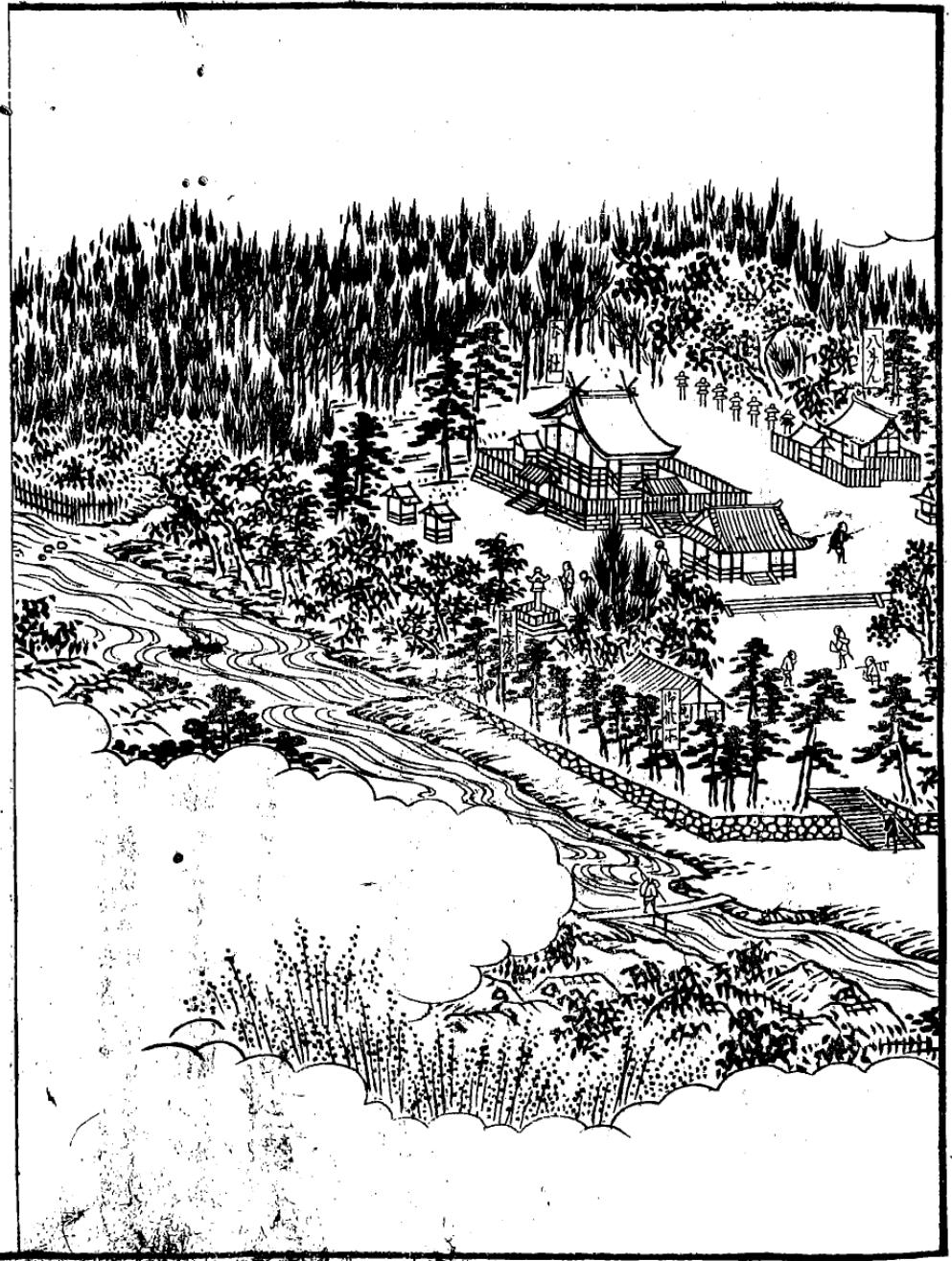
とりい
鳥居の額は小野の
道風の筆
いしとうろ
石灯籠は村上天皇
の御寄附なり

八まん

御供所

本社

村上灯籠



事代主命 (八重) 事(言) 代主神とも。

記紀神話に登場する神。出雲の^{おおくにぬしのまこと}大国主命の子で、高天原からくだった建^{たけみかづちのかみ}御雷神らが国譲りを求めると父に代わってこれを承諾した。娘である媛^{ひめたらいすずみのかみ}蹈鞰五十鈴媛命は神武天皇に嫁している。後世、恵比寿神として

信仰された。

撰社 『撰津名所図会』に「二前本社に祭る」とある。神名は未詳。末社 『撰津名所図会』に「松尾、天照大神、八幡、出雲大社神」と注記される。八幡は「八まん」として図中に見える。また

天照大神は図中の「くわんをん(観音)」にあたるか。

小野道風 八九四〜九六七年。平安時代の能筆。三跡の一人。村上^{村上}天皇 九二六〜九六七年。第六十二代の天皇。その治世は天曆の治と呼ばれ、後

世聖代視された。応和三年(九六三年)、長田神社に雨を祈ったことが『日本紀略』に見える。

石灯籠 『撰津名所図会』によれば、村上^{村上}天皇が祈雨の際に寄附したもの。「拝殿の西にあり」(同書)。

播磨名所巡覽圖會卷之二

所名

長田神社 長田村あり 街より並松二丁許、民家を經、兵庫より廿七丁西あり、日本紀、長田の里と云ふ

日本紀神功皇后記云、事代主命、皇居を誨て心を長田の國と爲すと

若孫入より、山媛の分長媛を以て是と稱し、即三韓より

遷らせ給ふ所のより、七生田のより、又曰く

社記云、村上天皇、應和三年七月十五日雨と長田の社より、又云、あつとく

あり、葉人形を三子余社の神、乃森より造り、赤尻池の沖、藤石、津樂

を守り、中田村の濱、をかのまう人形とせん、ぐと切捨、是三韓退治の

志、似たりと云う、又山附西、廣の末田氏を客家と稱す

按、赤尻人形と切捨、乃森、若の後の遷り、あつとく、赤尻池、物治、廣のり、あつとく、人形

明泉寺 長田村の 天照山と号し、奉き六月如未、兵部より蓋敷す、谷合敷、中

誠中、若田、聖後、二宮の御軍より、迎も、遊々、きと、ええ、べ一人、妙で、馳合、て、戮ひ、く

誠中、若田、聖後、二宮の御軍より、迎も、遊々、きと、ええ、べ一人、妙で、馳合、て、戮ひ、く

播磨名所巡覽圖繪卷之二

名所

長田神社

長田村にあり。街道より並松二丁許、民家を經て本社に至る。式内にして例祭八月十八日。此辺六ヶ村祭祀す。

長田里

兵庫より廿七丁西にあり。日本紀に長田の里といふ。

日本紀神功皇后記に云、事代主命皇后に誨て、心を長田の國に祭れと

長田神社 長田村にある。街道から松並木が二丁ほどあり、民家を通り過ぎてこの社にたどり着く。『延喜式』に掲載された神社で、例祭は八月十八日。このあたりの六ヶ村で祭祀を行っている。

長田里 兵庫から二十七丁ほど西にある。『日本書紀』に「長田の里」とある。

『日本書紀』神功皇后紀に以下の通りある。

「事代主神が皇后に教えて「私の心を長田の國に祀れ」とお告げなされたので、葉山媛の妹である長媛にこれを祀らせた」。これは三韓征伐からお帰りになったときのこと、生田神社（の由緒）と同じである。

当社の社記に以下の通りある。「村上天皇の治世、応和三年七月十五日、長田神社に雨乞いをした」「また大祭事ということがある。蕨人形を三千あまり作って、社の奥の森から出し、東尻池の御旅所へ神輿を守って行き、野田村の浜でその蕨人形をさんざんに切つて捨てる。これは三韓退治の真似である」といふ。さらにこのとき、西須磨の前田氏を客家と称する」。

思うに、蕨人形を切り捨てるのは（社記にいうような三韓退治の真似ではなく、昔の祓えの遺風であろう。『源氏物語』須磨の巻の祓えでも人形をお用いになったことが、同書に見えている。また和泉式部の詠んだ六月の祓えの歌に以下のごとくある。

思ふ事…（心にかかることは水無月の

告給ふによつて、葉山媛の弟長媛を以て是を祠しむ云々。即三韓より還らせ給ふ時の事にて、生田の事に同じ。

社記に云、村上天皇応和三年七月十五日、雨を長田の社に祈る。○又大祭事といふ

事あり。藁人形を三千余、社のおくの森より造出で、東尻池の御旅所へ神輿

を守りて、野田村の浜にてかのわら人形をさんぐくに切捨る也。是三韓退治の

真似なりといへり。又此時、西須磨の前田氏を客家と称す。

按るに藁人像を切捨る事、是昔の祓の遺事なるべし。源氏物語須磨のはらひにも人像

を用ひらるゝ事見へたり。又和泉式部六月はらひの哥に

思ふ事みなつきねとてあさの葉をきりにきりてもはらへつるかな

明泉寺 長田村の 天照山と号す。本尊大日如来。

いにしへは大伽藍なりしを、寿永の
兵乱より荒廃す。一谷合戦に越中

前司盛俊の陣所なり。

越中前司盛俊墓 長田村名倉池の傍に

あり。塚しるし、松あり。

越中の前司盛俊は一谷の敗軍より逆も逃るべきとも覺えず、一人残て馳合て戦ひける

街道 西国街道。

式内 平安初期に編纂された『延喜式』神

名帳（九二七年）に掲載されている神社の

こと。社格の一種として重視される。

此辺六ヶ村 長田、西代、東尻池、西尻池、

池田、西須磨（『撰津名所図会』）。

日本紀神功皇后記 『日本書紀』神功皇后

紀の撰政元年条に以下のごとくある。「事

媛の弟長媛を以て祭はしむ」。

三韓 新羅、百濟、高句麗。神功皇后は仲

哀天皇九年、渡海して朝鮮半島に攻め入り

これを服属せしめた。前掲『日本書紀』の

記事はその翌年のものである。

生田の事 『日本書紀』神功皇后紀、撰政

元年条では長田社の記事の直前に「稚日女

尊、誨へまつりて曰はく、「吾は活田長峽

国に居らむとす」とのたまふ。因りて海上

五十狹茅を以て祭はしむ」として生田神社

の創始が語られる。

村上天皇応和三年： 『日本紀略』同日条

に祈雨のため長田社に奉幣したことが記さ

れている。応和三年は西暦九六三年。

西須磨の前田氏 本書後段に以下のごとく

見える。「前田氏の故家 西須磨の里長也。

神功皇后の御時より相續すといへり」。

源氏物語須磨のはらひ 須磨の巻、上巳の

祓のくだりに「舟にことごとしき人形乗せ

て流す」とある。

和泉式部の哥 『後拾遺集』雑六・一二〇

四番歌。

本尊大日如来 『撰津名所図会』に「行基

の作。長五尺計」とある。

寿永の兵乱 いわゆる源平の合戦。寿永は

西暦一一八二〜八四年。

盛俊の陣所 盛綱は一ノ谷合戦で山の手

（鴨越口）の守備を担当した。

越中前司盛俊は 以下の記述は専ら『源平

盛衰記』第三十七・則綱討盛俊事に拠る。

今日、すべてなくなつてしまへと、麻の葉を切りに切つて祓えをしたなあ。」

明泉寺 長田村の奥にある。天照山と号し、本尊は大日如来である。昔は大寺であったが、寿永の乱によつて荒廃した。一ノ谷の合戦のとき、越中前司盛俊の陣であった。

越中前司盛俊の墓 長田村の名倉池のそばにある。墓のしるしに松がある。

越中前司盛俊は一ノ谷の負け戦からとても逃れられないと思ひ、一人残つて馬を走らせ戦つたが、猪俣近平六則綱と馬を並べ、ひつつかんで下に落ちた。盛俊は世に知られた大力で、二十人力もある。しかも六十人で上げ下ろしする大船を一人で持ち上げたことがあるので、実際には七、八十人力もあるだろう。したがつて則綱の及ぶところではない。（盛俊が則綱の体を）押しつけ

が猪股近平六則綱は証並く引籠り馬より高き俊は空へる大力の者なりは
 廿人カマて内力六十人として下りもる大船と一人して扱ひ多し七十八人カもみづらんば
 近平六の及ぶ所にあらず。推付て首をはねんとするに名を尋ければ、又下よりも名
 乗を尋ねて、さては能敵に出合たり。偽りて彼が首を取らばやと思ひ、盛俊に云やう
 は、御辺則綱が命を助けかへし給はば、鎌倉殿に申て和殿并に親しき人々をなだめ
 申さんと誠しくいへば、盛俊歎びて云く、我に男女の子ども二十余人持さふらへば、彼等

所名

駒林松

駒林は遠く乃地をり松と松林のみなり
 先源氏のつり俗流之今二葉の松をて二樹あり

蓮乃池

長田の西の方より手を取津の村の末にあり
 二百八十畝あり修其觀外の眺けし松あり

蓮の祠

池の北岸にあり
 の祠と云う其美しきなり

いふ所の駒林の松とんば石と石と
 薩摩守忠度塚 石塔と殿あり 但し忠度乃腕塚ハ明石より西にあり
 ことつらむ西の女の大なるまば源平より西にありとて遊らざるもいふ

が、猪股近平六則綱に駈並て引組で馬より落、盛俊は聞へたる大力の者なれば
 廿人力にて、内力は六十人して上下する大船を一人して扱ひければ、七十八人力も有べければ、
 近平六の及ぶ所にあらず。推付て首をはねんとするに名を尋ければ、又下よりも名
 乗を尋ねて、さては能敵に出合たり。偽りて彼が首を取らばやと思ひ、盛俊に云やう
 は、御辺則綱が命を助けかへし給はば、鎌倉殿に申て和殿并に親しき人々をなだめ
 申さんと誠しくいへば、盛俊歎びて云く、我に男女の子ども二十余人持さふらへば、彼等

て首をはねようとし、(則綱に) 名前を尋ねると、また下(にいる則綱) からも(盛俊に) 名前を尋ねる。(相手が盛俊であることを知って、則綱は) 「さてはよい敵に出会った。策略を立てて彼の首を取りたいものだ」と思い、盛俊に「貴殿がもし拙者の命を助け、無事に帰してくださるのなら、鎌倉殿(頼朝) に申しあげて、あなたとご親族の方々の罪を許すよう仲介いたしましょう」と誠実そうに言うので、盛俊は喜んで「拙者には男女の子供が二十数人ござるので、彼らに対して将来よろしく御恩があるように(頼朝に) ご仲介ください」という。前は畑、後ろは水田という場所で、二人は敵に腰掛けて話をする。(そのとき、則綱は) 盛俊の油断を見すまして、両手に力を入れ(盛俊の体を) 真つ逆さまに後ろにある深田に突き倒す。(盛俊は) 頭が水の底にあり、足が岸の端にあるような状態で、起きよう起きようとすると、則綱が上に乗って首をかき切り、太刀の先にそれを刺して高くかかげ、馬に乗って(陣に) 馳せ帰る。

蓮の池 長田の西の方にある。『平家物語』の一ノ谷陣中を描いたくだりにたびたび登場する。広さは四百五十畝。昔、行基が農業の助けとして掘った。

蓮の祠 池の北岸にある。土地の人は行基を祀った祠だと言っているが、実際のところは不明。

の為すへど、をよろしく御恩有べくやう申宥め給へといふ。前は畠、後は水田なる所の
中の畔の有に二人尻打かけて物語りしつゝ、盛俊が油断を見すまし、左右の手にて
力を入、真逆さまに後の深田へ突倒す。頭は水の底に、足は岸の端に、起んくとしける
所を、則綱上のにりて首を掻切、太刀の先に貫き、高く捧げ、馬のにりて馳かへる。

蓮の池 長田の西の方にあり。平家陣中の文に多し。広さ 蓮の祠 池の北、山ぎしに有。土人行基
の祠といへり。其実はしらず。

名所

駒林松 駒林は此辺りの地名なり。松は松林の事なり。

光源氏の事は俗説也。今、二葉の松など云て一樹有。

へいにしへの駒の林の松みればうへし古葉もかはらざりけり 兼頼

薩摩の守忠度塚 駒林の中にあり。但し忠度の腕塚は明石に有て腕塚町

石塔を居たり。

ともいへり。尤西の手の大将なれば、須磨より西へさして逃られけるともいひ、又

「異本には、かるも川、須磨、板宿を打過落るとあれば、此辺にも有べし。」

猪股近平六則綱 ？一八九二年。通称は

小平六、諱は範綱とも。武蔵国の住人、猪
股党の頭領。『平家物語』老馬に「八ヶ国
に聞こえたるしたたか者」と評される。

内力は：『源平盛衰記』に「盛俊は聞え
たる大力の大の男、徐には二十人が力と言
ひけれども、内々は六十人にして上げ下ろ
す大船を、一人して扱ひける者なりければ、
七、八十人が力もやありけん」。「内力」は

「内々」の誤りか。『源平盛衰記』に「盛俊嬉し
盛俊歎びて 『源平盛衰記』に「盛俊嬉し
に拠つて盛俊の故事を綴る。

駒林の松 駒林はこのあたりの地名である。

松というのは松林のことである。光源氏が
植えさせたというのは俗説である。現在で
は、二葉の松などといって松が一本ある。

いにしへの：（久しぶりに駒林の松を
見てみると、かつて植えた古い松の木
の葉もそのまま変わっていない。）

薩摩守忠度塚 駒林のなかにあり、石塔を

建ててある。ただし忠度の腕塚は明石にあ
り、（その付近を）腕塚町と言っている。（忠
度は一ノ谷合戦の際）陣のいちばん西を守
っていた大将なので、須磨から西に向かっ
てお逃げになったともいい、また『平家物
語』の異本には「忠度は）かるも川、須磨、
板宿を通り過ぎて落ちていった」とあるの
で、このあたりにも（墓が）あつてよいは
ずだ。

蓮の池 『撰津名所図会』に行基が「蓮一
株を種給ひ浄土八功德池 准給ふ」とい
う伝承が紹介されている。

平家陣中の文 例えば『源平盛衰記』第三
十七・一谷落城並重衡卿虜事に「三位中将
は蓮の池をも打ち過ぎ」。

行基 六六八〜七四九年。寺院建立や灌漑
土木に関する伝説が多く残る。
光源氏の事 『撰津名所図会』に「源氏須
磨に居給ふときこゝに植置給ひしとぞ」と

ある。
石塔 『撰津名所図会』に「塚上に五輪の
石塔を居たり」。

忠度の腕塚 岡部六弥太と戦って切り落とされた忠度の片腕を祀ったもの。くわしくは中村真理『神戸学院大学明石ハウス「くずし字解説講座」活動成果報告書』『播州名所巡覧図絵』『明石郡 訳注』（神戸学院大学地域研究センター、二〇二一年）の該

当項を参照。

腕塚町 現在の明石市天文町一丁目付近。尤西の手の大将 一ノ谷合戦の際、忠度は最も西に位置する塩屋口を準備した。西へさして 延慶本、長門本『平家物語』には忠度が西を指して落ちたと記される。

異本に： 以下「」内の文章は掲出した影印に含まれない箇所であるが、後続の丁から翻字し、便宜上ここに繰り入れた。「異本」は『源平盛衰記』を指すと思しい。すなわち第三十七・忠度通盛等最後事に「かも川、須磨、板宿を打ち過ぎつつ、渚に

付きてぞ落ち給ふ」と見える。

知章 一一六九〜八四年。平氏の一門、平知盛の長男。武蔵守となる。一ノ谷合戦に敗れ、父を逃すために身代わりとなつて討たれた。謡曲『知章』などでよく知られる。



知章 ともあきら

孝死 かうし

頼賢忠死 よりかたちうし



『源平盛衰記』第三十八・知盛遁戰場乗船
 事「中納言危く見え給ひければ、御子武蔵
 守知章中に阻て、引組みて落ちて、取つ
 て押さへて首を掻き、敵の童落ち重つて武
 蔵守をば討ちてけり」「知章は忽ちに勇兵
 の首を獲て、専ら壯士の名を頭はし、遂ひ

に父子の死を救ひて、永く己の命を亡ぶ」。
 『知章』には知盛の「子は親のため命を惜
 まぬ心ぞや」という述懐がある。
 頼賢 ？〜一八四年。通称監物太郎。平
 知盛の郎党。知盛を逃がすために奮戦して
 命を落とした。『源平盛衰記』第三十八・

知盛遁戰場乗船事に「中納言の侍に監物太
 郎頼賢は究竟の弓の上手」「敵の童落ち重
 つて武蔵守をば討ちてけり。監物太郎頼賢、
 弓矢をばからと棄てて落ち合ひ、童が首を
 取る。頼賢は主の首と童が首と取り具して、
 馬に乗らんとしけるが、膝の節を射させ、

今は最後と思ければ、人手にかからじとて、
 腹掻き切りて死にけり」とある。なお『平
 家物語』でも矢種のかぎり射つくした後、
 打物抜いて戦ったと見え、凶中右下の徒立
 ちで戦う人物はおそらく頼賢であろう。沖
 を指して馬を進める武者が知盛。

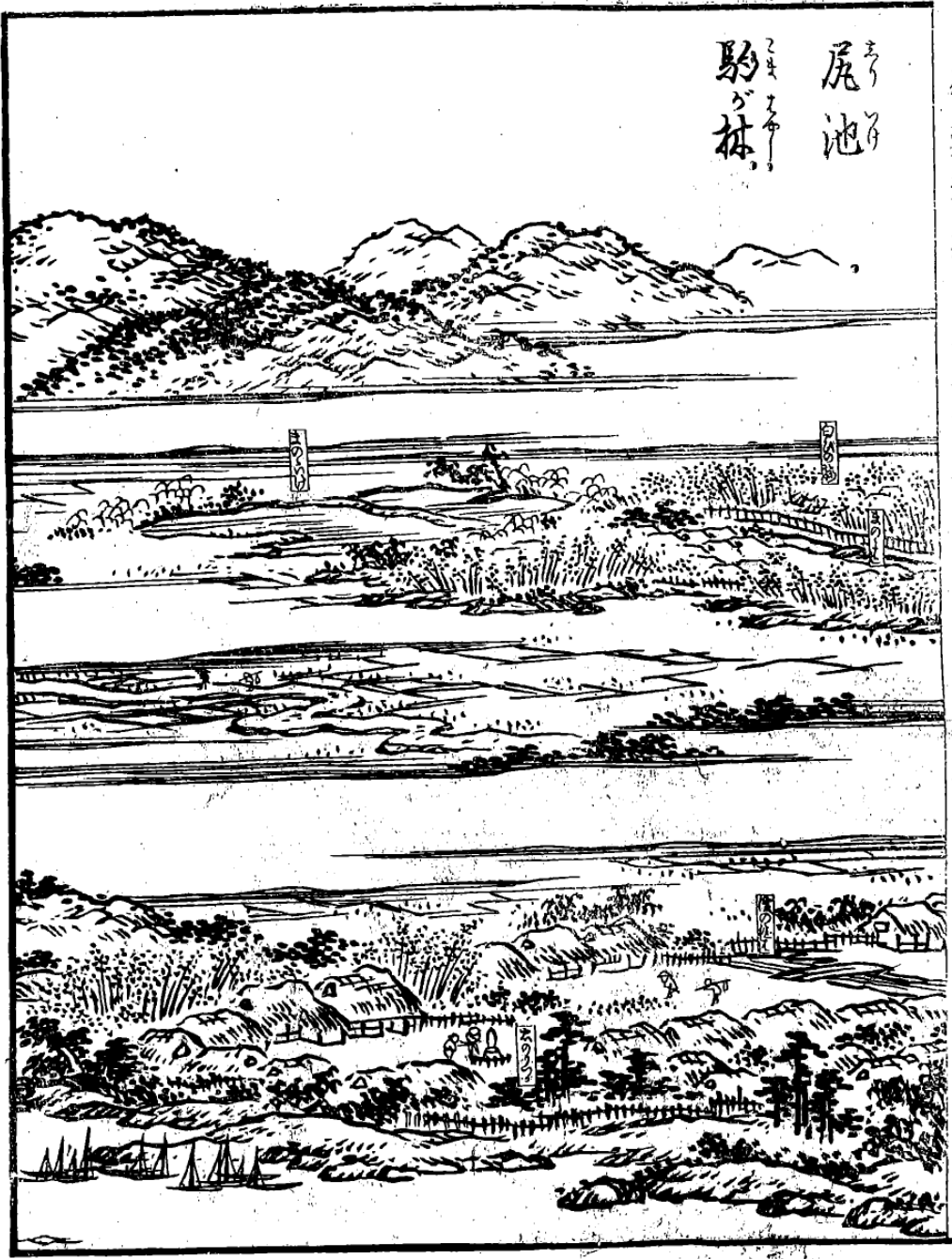
まのゝはし

句ひの梅

浜の繼はし

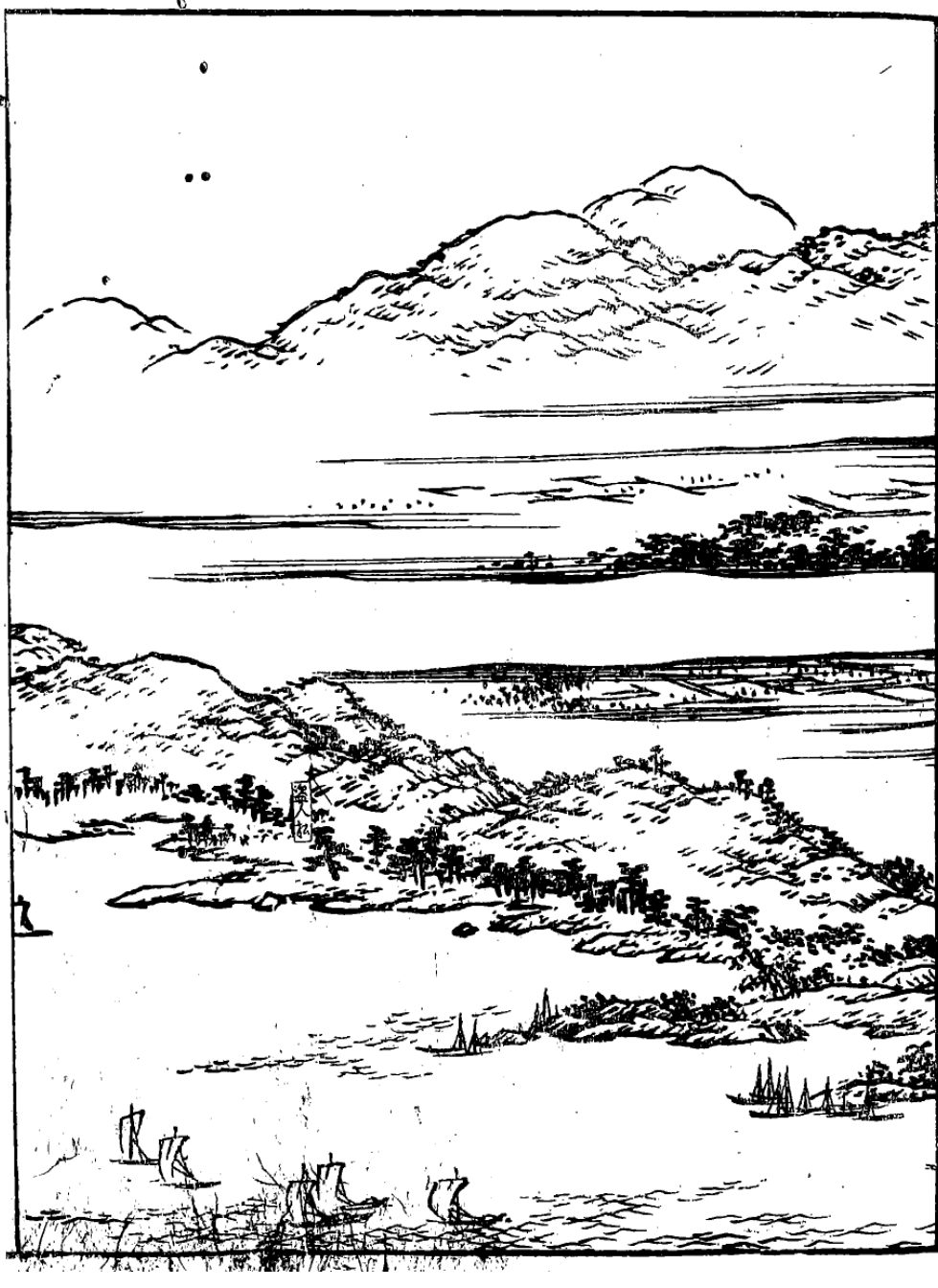
忠のりつか

まのゝいけ



尻池
駒が林

尻池
駒が林



まのゝはし 東尻池村の西方にある石橋。

「ふみみても物思ふ身とぞなりにける真野の継橋途絶えのみして」(『後拾遺集』雑一・八八〇、相模)などで知られる歌枕(『撰津名所図会』)。

まのゝいけ 東池尻村の西にある池。「真

野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を

立つべきものか」(『万葉集』卷十一・二七
七二)以来の歌枕(『撰津名所図会』)。

句ひの梅 東尻池村にある。菅原道真が太宰府に下向した際、和田崎に船を留めてこの花の香を愛でたとされる(『撰津名所図

会』)。

淀の継はし 『撰津名所図会』に「真野継

橋の一名とも、又駒ヶ林村にありともいふ」とするが、この図では真野の継橋とは別の橋とされているらしい。「真野の浦の淀の継橋心ゆも思ふや妹が夢にし見ゆる」(『万

葉集』卷四・四九〇、吹茨刀自)以来の歌

枕。

盗人松 本書後段に「盗人松 野田村にあり。むかしは二本ありしが、朽て今は一本、大木也。此松海辺に有て、白波たち止間なきが故の名なりといへり」とある。